



新聞紙に抱かれて

その壱

昼過ぎに出稼ぎ先から自宅に戻ると年老いた母以外は誰もいなかった。「あいつら、何処行ったんや」私の問いかけに母はよく聞こえなかったのか返事をしなかった。

『まあ、ええか・・・』とやり残しの仕事に取り掛かった。あっという間に辺りが薄暗くなり、仕事にキリがついた私は、『まだ、帰って来んなあ、映画でも見に行ったんかいのお・・・しゃあない、飯でも作るか』

侘しい夕食を済ませ、仕事を再開し、なんとかやつけたのは、深夜2時過ぎであった。家族が帰って来ないのを不思議に思いながらも、疲れきっていた私は倒れるように眠りに着いた。

しかし、翌日の昼を過ぎても家族は帰って来なかった。私に告げずに外泊することはありえないので心配になり、母に「あいつら、どっか行くって言うとした？」

母は、怪訝そうな顔で信じられない事を言った。「あいつらって？」・・・「俺の家族に決まっとるやん」・・・困った様な顔の母は、聞き取れないような小さな声で・・・「あんたの家族はワシだけやろ・・・」

あゝ～終に母親もボケが入ったか・・・と母を見ると、その目はしっかりとした常人のものだった。突然、私の頭がグルグル回りだした・・・意識が遠のくその時、白い布のようなものが見えた気がした・・・

意識が戻ったのか戻らないのか、私の耳に男女の会話が聞こえてきた・・・

「あんたらが、ちゃんと治ったって云うから連れて来てもらたのに・・・これじゃ、前より悪うなっとるで」・・・聞き覚えのある母の声だった。

「いえ、あちらに居た時は本当に良くなっていたんです。不思議です。」白衣の男の一人がすまなそうに母に告げた。

するともう一人の白衣が「ここに来る車の中でも、やたら、奥さんやお子さんの話をしてみましたけど、彼は結婚してたんですか・・・」

「・・・そんなん、随分昔の事や・・・働きもせんと夢みたいなことばっか口走って毎日呑んだくれてたこの子に愛想つかして、乳飲み子二人抱えて・・・出てったよ・・・ワシも止めることはようせなんだ」

「そうですか・・・彼の頭の中じゃ・・・お子さんは高校生と中学生で、彼らの為に出稼ぎに出てるらしいです・・・何か、見馴れないプラスチックのモノを開けては覗き込んで、親指を動かしてまた閉じる。そんな動作ばかり繰り返しています。」

「やはり、もう一度連れて帰った方がよろしいでしょうか・・・」

「当たり前でしょ！私のことを母親と勘違いしてるのよ、この男は！・・・おお気持ち悪い・・・今度は必ず、旨くやってよ！」

大柄の女は私の方に振り向きもせず・・・その場を後にした・・・金髪を靡かせて

(ちょっと風呂敷広げ過ぎじゃないっすか・・・編集者)

その参

これまでのあらすじ)

主人公の私が出稼ぎ先から自宅に戻ると、居てるはずの家族がいない。そればかりか彼の母親が発した「あなたの家族はワシだけや」という奇妙な言葉。彼には本当に家族がいないのか？・・・謎の白衣の男達・・・彼が母親だと思い込んでいた老婆が、実はブロンドのオネエちゃんだったというドタバタ・・・果たしてストーリーは收拾可能なのか！

「奴は、生き残りなのかい？」若い方の白衣が聞いた。

「ああ、アノ島のな・・・2～300人は居るらしいよ。世界中の施設に散らばっているらしいが・・・」

「前から気になってたんだけど、あいつがいつも弄ってるプラスチック・・・ありゃあ何だい？」

「う～ん、俺もよく解らないけど、昔のコミュニケーションマシンらしいぜ・・・」

「え、その為だけにあんなモノを持ち歩いていたのかい？」

「あまり大きな声じゃ云えないが・・・アノ島にはかつて国家があり、今のウチみたいに結構羽振りが良くて、ウチが目標にしていた時代もあったようだ。」

「冗談だろ！あの汚染地域が・・・それに何故、あの島・・・否、あの国はあんな狭い所にあんなにも沢山の核施設やミサイルを作ったんだい？凶器の沙汰じゃないか！」

「そうさな、そこは俺にもわからない。彼らは過去に二発もの原爆を喰らった唯一の被爆国で、核には相当のアレルギーがあったはずなんだが・・・それだけ、ウチの戦略にまんまと嵌ったんだろう。彼らはウチをずっと『貧しい独裁国家』だと思い込んでいたらしい。まあ、そう思わせる為にウチの政府は完璧な芝居を打ったんだが・・・勿論、米国の協力が不可欠だったが。何と言ってもハリウッドから呼んだアノ役者・・・なんて言ったっけ？」

「キムのことかい？あの大スターの・・・」

「そうそう、名演技だった。何をしでかすかわからない独裁者・・・彼らはそう信じ込んだ。そう信じ込ませなければならぬ事情がウチにはあったんだ。この地域に『経済のみの大国＝商人の国』は一つで十分だったから・・・後発のウチにはアノ島が目の上のタンコブだった。彼らがあのまま宗教もなく思想もなく突っ走れば、ウチは永遠に追いつけなかった。彼らを覚醒させて足踏みさせる必要があったんだ・・・その薬は利きすぎたきらいがあるが・・・」

唯、中には本当のウチの事を見抜いてアノ島から亡命してくる者もいたんだが、アノ島の官僚はウチに『拉致』されたんだとマスコミにキャンペーンをさせて世論を操作して連れ戻した。戻った亡命者の中にはウチの戦略を語ろうとする者もいたが、誰も相手にしなかったらしい。」

「しかし、間抜けな奴らだ。悲惨な内戦を経験したウチが何故、時代遅れの独裁国家を選んだと決め付けたんだろう。彼らと同じように経済のみの大国を目指したとはこれっぽっちも想像しなかったんだろうか。」

「うむ、誰しも、自分が、自分たちが、自国が、一番優れている、バランスが良いという思い込みがあるんじゃないのかな

おいっ、そろそろ奴が目覚ますぜ。お前が相手をしてやれよ。あんな形をしていても自分のことを未だ人間だと思ってるらしい。凶暴じゃないから安心しな。但し、シールドの外にだけは出すんじゃないぞ。俺は今晚、家族と回転寿司に行く約束してるんだ、頼んだぜ。」

・・・その四は・・・あるのか、ないのか???